福祉フォーラム通信 Vol.6

発行日：2009年3月1日
発行元：龍谷大学福祉フォーラム

前期共生塾「福祉のまちづくり」モデルの光と影 を開催！

第１回 6月28日(土) テーマ **21世紀のまちづくりビジョン**
講師 岩川 徹 氏(前・鷹巣町長)／富野 暉一郎(龍谷大学教授、前・逗子市長)

第２回 7月 5日(土) テーマ **鷹巣町モデルの光と影**
講師 大友 信勝(福祉フォーラム会長・龍谷大学教授)

第３回 7月26日(土) テーマ **福祉のまちづくりへの展望**
講師 井岡 勉 氏(同志社大学名誉教授)／塚口 伍喜夫 氏(流通科学大学教授、前・兵庫県社会福祉協議会事務局長)

2008年度前期共生塾は「福祉のまちづくり」モデルの典型を「鷹巣モデル」に設定し、その教訓と課題を今日的に問い直し、これからの在り方を学びあうことを目的に開かれました。

開始に先立って、羽田澄子監督の「あの鷹巣町のその後」を上映し、第一回は岩川氏と富野教授が自らのまちづくりの実践を総括し、理念と展望を語りました。共通するキーワードは住民参加であり、自治と民主主義をめざし、理念とビジョンをもったまちづくりが強調されました。第二回は大友教授が「鷹巣町モデルの光と影」を主題にして論点や争点を実証的に分析、検討する方法で、なぜ選挙戦に敗れたのか、その後のまちづくりはどのように後退、変質したのかについて語り、第二の夕張に近づいている新市民病院の問題から今後のあり方を問題提起しました。第三回は井岡氏と塚口氏が「鷹巣モデル」のシンボルである「ケアタウンたかのす」が住民参加でつくられた意義、それが指定管理者制度によってどのように変質したかを分析しました。「福祉のまちづくり」に必要なのは地域福祉の計画化や住民自治、当事者組織、社協の再編強化、社会的な運動だと提起されました。この講座から福祉のまちづくり全国交流会等を開けないものかという夢がわいてきました。これからも新たなモデルや方法を開拓していきたいです。

受講生の感想

○地域福祉を考えていく時、何が大切なのか、何をしていかねばならないのかということを学びました。
○「住民主体」がどうあるべきか、自治体・政治のあり方も含め、改めて考えさせられました。
○専門職として、市民として、何を求めていくのかを、明確化していくことの大切さを再認識しました。

前期専門セミナー「成人期を見通した学童保育専門職のしごと」を開催！

第３回 10月19日(日)
第４回 11月30日(日)
講師 中村 隆一 氏
(立命館大学教授、大津市知的障害者地域生活支援センター発達相談員)

６月に初回を開催してから夏をまたいで、全四回の講座日程が無事終了しました。およそ８０名近くの学童保育やこどもの発達に関心のある方々が熱心に受講されました。こどもにかかわる仕事の多くは、同時にこどもの発達にかかわり、その過程にかかわります。こどもが今どの段階で何を飛び越えようとしているか、人間としての力をどう蓄えていけるかについて認識を深めることは専門職にとって不可欠なことといえます。

今回の講座は乳幼児期からの発達も含めて講義をしていただきましたが、中村氏の講義を聞きながら、こどもへの理解は、深い人間理解に支えられる哲学的な思考をも要求すると改めて認識しました。「聞くたびに深まる。もっと中村先生の講義を聞きたい。」という感想に代表されるように、来年度も引き続き開講を希望する声が参加者から多く寄せられました。

受講生の感想

○乳児期前半、後半、幼児期で大切にしていくものがそれぞれ別のものではなくつながっているということがわかりとても良かったです。
○乳児期後半のお話の中で私自身の保育をふりかえる事ができました。これからも私自身の保育をふりかえり子どもたちと接していきたいです
○１～４回の講座は毎回楽しみでした。子育てと合わせて、クラブの子どもたちの成長を考えることができました。学んだ事を、もう少し実践として語ることができるように、これからも指導員を続けていきたいです。

後期共生塾開催

この世に生をうけた私たちのだれもの願い……生き生きとたのしく暮らしたい！
世の中が平和で美しく、だれもが希望をもちながら生きていきたい！

「生きる」を問う

戦争の時代であった２０世紀を超え、２１世紀は個々のいのちが光り輝く世紀にしたいものです。今回の共生塾は、「生きる」意味を問うことを通じて現代社会の問題にせまっていきたいと考え企画しました。仕事や子育て真っ最中の方々、高齢期を迎えあらためて生き方を探そうとしている方々、宗教実践や社会活動、地域づくりや社会福祉活動に取り組んでおられる方々、一緒に生きる意味を問い、自らの「生」を輝くものにしていきましょう。

場所 **龍谷大学瀬田キャンパス** ４号館201教室　定員 **各回50名**

2009年 2月 7日(土) 13:30～16:30　第1回 13:30～15:00　第2回 15:00～16:30
「生きているということ」
講師 小室等氏(歌手)＋高橋卓志氏(龍谷大学社会学部 客員教授 長野県神宮寺 住職)

2009年 2月28日(土) 第3回 13:30～15:30
「老・病・死の現場から―生きるを問う」
講師 田畑正久氏(佐藤第二病院院長)

2009年 3月 7日(土) 第4回 13:30～15:30
「慈しみとつながりの時代―生きる力を求めて」
講師 鍋島直樹(龍谷大学法学部教授)

2009年度福祉フォーラム会員入会のご案内

２００９年度の福祉フォーラム会員入会の申込みを受付（４月１日開始）いたします。
詳細は、後日ご案内いたします。

訂正とお詫び 本誌前号(Vol.5)にて、記載内容に誤りがありました。以下のとおり訂正するとともに深くお詫びいたします。

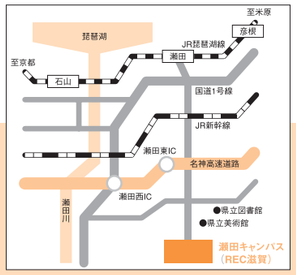
◆1ページ目の会員の声、井上源太郎さんの記事において3箇所の訂正があります。
・2行目 自分自身地区社協の→自分自身学区社協の ・3行目 会長、スクールガード→会長、子ども安全リーダー・スクールガード
・5行目 私自身は、禁酒→私自身は、断酒

お問い合せ

龍谷大学福祉フォーラム事務局(ＲＥＣ滋賀)
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL／077-543-7744 FAX／077-543-7771
E-mail／r-fukushi@ad.ryukoku.ac.jp
ホームページ／http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/fukushi/

電車・バス：JR琵琶湖線「瀬田」駅下車
帝産バス「龍谷大学」行き（約8分）
お車：名神高速「瀬田西IC」（大阪方面から）
「瀬田東IC」（名古屋方面から）より
文化ゾーン方向へ車で約5分 【駐車場有】

JR京都駅
快速16分
JR石山駅
普通2分
JR瀬田駅
快速44分
JR彦根駅
バス約8分
龍谷大学瀬田キャンパス



福祉フォーラム2008「当事者主権の価値と実践」を開催！

1日目 10月4日（土） 基調講演 テーマ「水俣学に学ぶ」

原田　正純　氏（熊本学園大学教授・水俣学研究センター代表）
対談　原田　正純　氏
　　上林　茂暢（龍谷大学教授）
コーディネーター　大友　信勝（龍谷大学教授・福祉フォーラム会長）

「水俣学に学ぶ」というテーマで原田氏の基調講演、上林教授との対談があり、司会を大友教授が担当しました。原田氏はやさしく穏やかな語り口でスライドを使って、参加者に、「水俣学」とは何か、なぜ、公害の原点といわれるのか、等をご自身の研究と実践の歩みを入れて話されました。

公害被害は社会的に最も弱いところに現われ、差別のあるところに深刻化します。水俣病が公害の原点といわれるのは、悲惨、大規模ということだけではなく、食物連鎖による環境汚染と人類の危機が見られる公害だということにあります。胎児性水俣病は人類の未来に対する警告の象徴であります。それまでの医学で言われていた「胎盤は毒物を通さない」という定説を覆したのは、病院から患者家族を訪ね、フィールドワークで患者や母親たちの現実と実態から学ぶ姿勢と研究方法によるのです。問題解決の原点は現場・当事者から学ぶことにあります。いま、世界ではカナダの先住民居住地域、ブラジルのアマゾン等で類似の公害があり、日本の教訓を生かしていく課題があります。胎児性水俣病の子どものいのちは「存在が宝子」であり、多くの未来のいのちをまもる決意につながります。

水俣学とはこの教訓を学ぶ学問であるというのが原田氏からのメッセージでした。上林教授は、足尾の「谷中学」や水俣の「水俣学」に共通するのは、加害者が責任をとろうとせず、被害者が閉塞状況に置かれることを見据え、「当事者主権の視点」から問題の本質や課題を見ていく考え方だと話されました。当事者（被害者）が専門家・市民とともに問題に立ち向かう中で学問や研究方法も鍛えられます。市民社会の民主主義も当事者・現場から学ぶこと、共生が少数者の権利を尊重し、多くの市民の安心・安全を作り出すことを学ぶ視点が提起されました。「水俣学」が持っている意義と普遍性を学び、学問的に希望の持てる集会になりました。

参加者の声から
- ■小・中の「社会」の中だけでしか学ばなかった水俣病に、今回改めて水俣病の悲しさを感じました。技術の進歩がどんどん進んでいく時代で注目されるのは、生活の便利さばかりでその便利さの犠牲となっているものにはなかなか目が届きません。
- ■いろいろ考えさせられました。水俣病がこんなにもいろんなことを教えてくれるとは思わなかったです。

2日目 10月5日（日） 分科会・講演 テーマ 当事者とともに考える

分科会Ⅰ「依存症からの回復とその支援」

猪瀬　健夫　氏（びわこダルク施設長）
山口　浩次　氏（大津市社会福祉協議会）

分科会では、アルコール依存症の方、家族の方などが発言し、依存症で苦しんでいる方々の実体験と、当事者同士のミーティングを通して依存症からの回復を支えあっているという実践が紹介されました。

そして、薬物依存症経験者であり、びわこダルクの施設長でもある猪瀬氏が、薬物依存症者の実態とその回復の実践を紹介してくださいました。

ダルク（ＤＡＲＣ）とはDrug Addiction Rehabilitation Centerの頭文字をとった言葉で、全国に四十数か所ある民間の薬物依存症回復施設のことです。

猪瀬氏は語ります。「薬物依存はクスリによって自分のコントロールを失ってしまう状態であり、病気です。犯罪者として刑務所に隔離しても治らない。出所したとたんクスリを買いに走る。病気には『治療』が必要なんです。このままではだめだという、自らのどん底体験が『治療』の成功のカギになる」と。

ダルクで取り入れられている「治療」は、経験者同士がミーティングを重ねるセルフヘルプの実践です。クスリによってどん底の生活をした人の経験が自分と重なり、自分の体験を話すことが仲間の心を開きます。こうして「当事者同士が体験を話し、伝え、分かち合う」ことで、回復への道を歩み続けることを学びました。

参加者の声から
- ■当事者の問題というより、自分の問題というようなとらえ方で聞けました。
- ■当事者のちからとは何か、当事者の範囲とは何か、あらためて考えさせられました。

分科会Ⅱ「多重債務当事者からの発信とその援助」

土井　裕明　氏（弁護士）
生水　裕美　氏（野洲市消費生活相談員）
コーディネーター 長上　深雪（龍谷大学教授）

多重債務者問題について先進的な取り組みをされている野洲市・生水氏と多重債務者問題にかかわっておられる土井弁護士のお二人から現況とかかえる問題について報告していただきました。

野洲市は市として多重債務者問題に直接かかわる市民相談室を開設し、専門的に対応する消費生活相談員を配置されています。多重債務の問題はともすれば個人の責任で解決すべき問題としてとらえられがちな中で、野洲市は、行政責任を明確にし、内部でのネットワークをしっかり形成するとともに、外部の専門家とも協議して解決に向けての取り組みをしているところに先駆性があります。これを野洲市だからできる、といった特別なものとして捉えるのではなく、しっかりと教訓化していくことが重要であると再認識しました。

「相談をたらい回しには絶対しない」「相談者も行政もともによかったと思える取り組みをしたい」という生水氏の発言や、「多重債務者問題は他人ごとではない」「専門家とつながることが必要」という土井弁護士の発言の一言ひとことに学びがより深まりました。多重債務者問題を通して、日本の社会を考え、さらには行政の問題、専門職の問題など幅広い討論ができた分科会でした。

参加者の声から
- ■事例も踏まえての話だったのでとても分かりやすい内容でした。現代の貧困などが問題視されている今、多重債務者の問題も深刻な問題であると改めて認識できました。
- ■具体的な事例が聞けて良かったです。解決に向けてのスピード感、即対応・即行動が大切だと感じました。

分科会Ⅲ「こども主権とは何か―学童保育実践が伝えるもの」

川地　亜弥子　氏（大阪電気通信大学准教授）
コーディネーター 土田　美世子（龍谷大学准教授）

分科会Ⅲでは、学童保育に焦点をあてて、子どもの主権について考えました。

講師の川地氏は、学童保育に子どもを預けていたご自身の体験や、生活綴り方活動での子どもたちの作文、VTRを交え、学童保育が子どもに豊かな放課後を提供する可能性を提示されました。その中で、こども主権の第一歩は子ども自身が考え「選択できる」環境を大人が整え、こども自身が自分の権利に気づくことであると、示唆されました。

会場には学童保育の指導員の方々が多く参加されており、子どもたちと日々向かい合っている体験について、活発に質疑が行われました。参加していた龍谷大学の学生にとっても、刺激のある学びの場となったようでした。

参加者の声から
- ■こども主権はこども自身が自分の権利に気づくところから始まるということに気づかされました。
- ■今の子育てになくしかけている現代の問題を、忘れかけていた問題を、みつめなおせる機会になりました。専門性をもつことの大切さ、子どもに体験させる大切さを学びました。

講　演

ソーシャルデザイン ～共生社会へのアプローチ～

講 師　今中　博之　氏
（社会福祉法人 素王会 アトリエ インカーブ理事長／クリエイティブディレクター）
コーディネーター　筒井　のり子（龍谷大学教授）

社会福祉法人「素王会」理事長として、またクリエイティブディレクターとしての活動も名高い今中氏に、活動の根底にある信念、活動を推進する思いを熱く語っていただきました。「素王会」が運営する「アトリエ　インカーブ」では、障害のある方がアーティストとして創作活動を行い、その作品を社会に発信して高い評価を受けています。そこで働くスタッフは、彼らの作品をもっとも良い方法で世に出し、社会に生かされるような機会を創り出すように動きます。社会福祉法人ではありますが、その活動は従来の社会福祉事業とはまったく違う考えにもとづいて展開されています。その考えは、「障害のある人」がアーティストなのではなく、アーティストがたまたま「障害のある人」であったにすぎないということだと理解することができます。ソーシャルデザイン（社会性をもつ企てのこと・・・今中氏）とは、まさに「アトリエ　インカーブ」の取り組みそのものであり、またそこに今中氏が提起する「共生」の姿を見ることができた講演でした。こうした取り組みを普遍化させるためには、公的責任において社会福祉を整備することが不可欠だということも学ぶことができました。

参加者の声から
- ■福祉アート・デザインというと"障害者アート"の認識でしたが全く違うもので、観点変換させられるお話でした。社会福祉の世界にどっぷりつからず、一般の普通の感覚を持ち続けたいと思いました。
- ■とてもよかったです。福祉フォーラムだけれども、かたくない講演でよかったです。
- ■福祉を学んできたものとして常識を壊されました。大切な一日になったと思います。

2008年度後期専門セミナーを開催！

テーマ「子ども虐待対応のアセスメント」
アセスメントに求められる「見立て」～「行動」「家族」「ケース」の見立て～

第１回 10月18日(土)　テーマ アセスメント概論
山田　容（龍谷大学准教授）

第２回 11月15日(土)　テーマ 行動の見立て
望月　昭　氏（立命館大学教授）

第３回 11月29日(土)　テーマ 家族の見立て
倉石　哲也　氏（武庫川女子大学准教授）

第４回 12月 6日(土)　テーマ ケースの見立て
菅野　道英　氏（滋賀県中央子ども家庭相談センター主任専門員）
山邊　朗子（龍谷大学教授）／山田　容（龍谷大学准教授）

２００８年度後期専門セミナー「子ども虐待対応のアセスメント」が１０月１８日より４回シリーズで行われました。

第１回の「アセスメント概論」では、現状の援助実践においてアセスメントが効果的に行われていないのではないかとの認識のもとに、その背景として今日の主流なソーシャルワーク理論が環境と個人の関係性を総合的にとらえることを重視しており、結果として把握対象が拡大、拡散しているのではないかとの指摘がなされました。この点を踏まえ、虐待対応におけるアセスメントでは、具体的な変化に必要な情報の整理に焦点化すべきことが主張されました。加えて、リスク認識は必須となるものの、パートナーシップを形成する支援的関与としてアセスメントをとらえ、ストレングスを重視した情報収集の重要性が示されました。

第２回の「行動の見立て」では、応用行動分析の理論の概要が紹介され、解決に向けて実効的なプランを形成することを意識した問題行動のとらえ方について、先行刺激と当該反応、後続事象の関係性を中心に具体的に解説されました。特に暴力や虐待などの行動が生じるメカニズムにおいて、即時的な効果をもたらせやすい負の刺激が取られやすいこと、加害者の意図と被害者の思いが結果として一致してしまい悪循環が形成されること、変化に向けて正の刺激を重視していくことなどの説明は説得力があり、虐待事象の冷静な認識と具体的援助実践に有効な視点を得られるものでした。

また応用行動分析の視点は絶対的な理論というよりは、有効な支援に向けられたひとつの「思想」であるとの見解は、援助論研究のあり方を考える契機ともなる印象深いものでした。

望月氏は、幅広い援助活動に対して関心と造詣が深く、発せられる言葉の端々に援助する人たちを元気にするユーモアが込められており、参加者の方々もなごやかな雰囲気につつまれ、有益かつ楽しい講義をしていただきました。

第３回の「家族の見立て」では、倉石氏に「ケンプ家族ストレス尺度」について解説いただきました。また倉石氏がアメリカにおいて家族支援事業に参加された体験から、訪問活動を通して家族をいかにとらえていくのか、そこに先のストレス尺度をいかに活用していくのかなどが実践的に語られました。単にストレスの度合いをとらえるのではなく、そこにストレングス（強み）を基盤におく意義が強調されていたのが印象的であり、リスクの的確な判断と援助関係の構築のために重要な示唆を得ることができました。

最終回となった「ケースの見立て」では、菅野氏から、虐待ケースの見立てについて講義を受け、その後、模擬事例を用いた受講者によるグループ演習が行われました。菅野氏の実践をもとにした講義、解説には説得力があり、なおかつ演習も援助のプロセスに応じて段階的に進められ、実践的に見立てが理解できる内容となりました。受講者間の意見交流も活発になされながら、これまでの講座の内容が活かされる展開となり、全体のまとめとしての役割も担っていただけたように思います。

各回とも定員を上回る申し込みがあり、虐待対応におけるアセスメントの難しさの現れであるとともに、援助者の方々の熱意が反映されたものと思われます。３時間の設定であった最終回を除いて、９０分で進められた各回は時間が足りないとのご指摘もあり、今後の参考とさせていただきたく考えています。

参加者の声から
- ■アセスメント、見立ての必要性は知りながらも、実際には漠然としていてわかりにくい点が多かったのですが、講義を聞いて少し理解することが出来ました。
- ■現場で悩んでいる事が多いので、今回も参加させて頂きました。短い時間でしたが、とても良く分かりました。
- ■とても興味深く聞かせていただきました。日頃、係わっているケースのヒントをいただいたようでうれしかったです。この研修で学んだことを実践につなげられるように頑張りたいです。